

# 東京言語研究所

## 集中講義のご案内

＜演題＞ 極小主義アプローチに基づく日英語比較統語論  
—ラベル付けと転送を中心に—

＜講師＞ 斎藤 衛 氏（南山大学教授）

＜日時＞ 2018年3月24日(土) 13:00～18:00 (90分講義×3コマ)  
25日(日) 10:30～16:15 (90分講義×3コマ)

＜会場＞ 東京言語研究所（新宿区西新宿 6-24-1 西新宿三井ビル13階）

＜参加費＞ 一般 12,000 円

学生・大学院生・2017年度理論言語学講座受講生 9,000 円

＜申込み＞ ホームページ申込みフォームまたはFAXにて下記をご連絡下さい。（定数:50名）

※ 申込み受付期間は2月1日(木)～3月22日(木)までです。

- ①集中講義受講希望 ②氏名 ③フリガナ ④性別 ⑤住所 ⑥電話番号 ⑦Eメールアド  
レス ⑧区分（2017年度理論言語学講座受講生・一般・学生）⑨所属区分（大学生・大学  
院生・教員・会社員・その他）（上記情報は東京言語研究所事業以外には一切使用いたしません）

**講師紹介：** スタンフォード大学哲学科卒、MIT 大学院言語学専攻博士課程修了。南カリフォルニア大学言語学科助教授、筑波大学現代語現代文化学系講師、コネティカット大学言語学科准教授、南山大学日本語学科、人類文化学科教授を経て、現在、南山大学国際教養学科教授。専門は、統語論。 *Journal of East Asian Linguistics* の共編者であり、*Linguistic Inquiry*, *Glossa*, *Linguistic Variation*, *English Linguistics*, *Linguistics* などの編集委員、編集顧問も務める。主な編著書に、*Issues in Japanese Linguistics* (1986, Foris Publications, 共編著)、*Move  $\alpha$ : Conditions on its Application and Output* (1992, MIT Press, 共著)、*The Free Word Order Phenomenon: Its Syntactic Sources and Diversity* (2005, de Gruyter Mouton, 共編著)、*The Oxford Handbook of Japanese Linguistics* (2008, Oxford University Press, 共編)、*Japanese Syntax in Comparative Perspective* (2014, Oxford University Press, 編著)、『日本語文法ハンドブック：言語理論と言語獲得の観点から』(2016, 開拓社, 共編著)がある。

### ○ 問合せ先

公益財団法人ラボ国際交流センター 東京言語研究所

〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-24-1 西新宿三井ビル16階

TEL:03-5324-3420 FAX:03-5324-3427

E-mail:info@tokyo-gengo.gr.jp ホームページ:http://www.tokyo-gengo.gr.jp/

極小主義アプローチの下で極端に簡素化された枠組みを仮定した場合には、言語間変異の説明の可能性も絞られる。本講義では、句のラベル付けにおいて、英語で一致が果たす役割を、日本語では接辞文法格が担うことを提案し、二言語間の主な文法的相違を説明することを試みる。

第1、2講では、Chomsky 2015 に至る統語論の発展を概観する。第1講では、名詞句の分布、移動の義務性と局所性をめぐる伝統的な問題を復習する。その上で、第2講では、Chomsky の「ラベル付け」に関する提案を見る。言語は、二つの要素  $\alpha, \beta$  から構成素  $\gamma = \{\alpha, \beta\}$  を形成する「併合」を必要とするが、ラベル付けとは、 $\gamma$  の性質を決定するメカニズムである。Chomsky は、このラベル付けが伝統的な問題を解決し、さらに一致や文法格の必要性にも説明を与えるとする。

第3講以降は、日本語を特徴付ける現象を分析し、その理論的帰結を探る。まず、接辞文法格がラベルを提供しない弱主要部であるとする仮説を提案し、自由語順など、日本語の特徴的な現象を帰結として導く。また、分析を発展させつつ、 $\theta$  基準を除去し、その効果をラベル付けにより説明する可能性を示唆する。第4講では、項省略現象も仮説の帰結として説明し、N'削除現象の分析に基づいて、一致と文法格の役割を再検討する。

第5講では、照応形束縛の局所性を転送領域から導く Quicoli (2008) などの試みを紹介する。これをふまえて、日本語におけるNIC効果の欠如に注目し、これが一致の欠如に起因するとする Yang (1983) の分析を発展させつつ、転送領域の新たな定義を提案する。第6講では、この定義が、Hornstein (1989) などが提唱する制御の移動分析の問題を解決し、さらに、フェイズの定義や例外的格付与文の分析の簡素化を可能にすることを示す。

テキスト：ハンドアウトを配布します。

#### 時間割

\*進捗状況により変更の可能性があります。

1. 序：句構造、移動現象、文法格
2. ラベル付け、転送領域から移動の義務性と局所性を導く
3. 日本語におけるラベル付け：多重格、自由語順、語彙的複合動詞の説明
4. 日本語における省略現象：項省略と N'削除を中心に
5. 日本語照応形の分布から転送領域を再考する
6. 制御の移動分析、例外的格付与文の分析に関する帰結

#### 24日(土)

13:00 講義—1  
 14:30 講義—1 終了 休憩  
 14:45 講義—2  
 16:15 講義—3 終了 休憩  
 16:30 講義—3  
 18:00 講義—3 終了

#### 25日(日)

10:30 講義—4  
 12:00 講義—4 終了 休憩 昼食  
 13:00 講義—5  
 14:30 講義—5 終了 休憩  
 14:45 講義—6  
 16:15 講義—6 終了